

# 洛友会々々報

京都市左京区吉田本町  
京都大学工学部  
電気工学科教室内  
洛友会



## 石川芳次郎前副会長に名誉学位

先に京都市名譽市民に表彰された石川芳次郎前副会長は、此の度左記の如く文化博士の御榮譽を受けられました。洛友会員一同心より御喜び申し上げます。

○名譽文化博士(同志社大学)

昭和四十年十一月二十九日、同志社創立九〇周年記念式当日、学位記受領。

## 随想「神のソロバン」

石川 芳次郎

神さまの取り引きは現金計算ではない。一生の延払い計算である。

わたしは名譽市民も名譽学位もつける資格はないので、辞退するのがほんとうかもしれない。われわれは神さまからのおほめにあずかった時は平気で喜んでいますが、少し叱られると不平不満、はなはだしきは腹をたてる。じつに勝手なものである。よく考えてみると神さまの勘定は現金取り引きではないのだから、日々の生活にはプラスもあればマイナスもあるが、一生を通して考えてみるとじつに公平である。われわれの心の持ち方もこの理をよく考えると、いつでも、どこでもいかなる場合でも腹のたつことはない、日々是好日であろう。



## 山村忠行君を偲ぶ

洛友会々々長 鳥養利三郎

### 山村氏略歴

山村 忠行

明治二十二年四月十九日生  
大正六年 京都大学電気工学科卒業後  
川崎造船所 大阪電気軌道  
京都市電気局を歴任後  
昭和十九年より昭和四十年迄  
財団法人 応用科学研究所  
に常務理事として勤務  
昭和廿八年より洛友会幹事、その後  
昭和卅八年より副会長として活躍さる。  
昭和四十年十月廿七日御逝去

私は京都大学と応用科学研究所、並にそれ等と直接間接関連のある仕事で、生涯の大部を過しつつ、今日に及んでいるが、その後半生の二十余年間というものは、山村君が何時も私の側について居てくれた。そして事の大小を問はず、公私の別を論ぜず、何から何まで、援けたり引っぱったりしてくれた、そのおかげで私は皆さんに大きな迷惑をかけることなく、職務に堪へて来られたのであって、同君には全く頭が上らないのである。

私は長い間京都大学の重責に当らせられたため、研究所運営に専念出来なかつたので、結局山村君にたよりっぱなしになってしまった。内部の庶務経理はいうに及ばず、文部省などの対外接渉も総て山村君を煩はして処理して貰ったという次第である。応用科学研究所が、今日ここまで生き延びて来ただけでなく、とにかく一かどの業績を上げて来た、その第一の功労者は山村君を措いて外にはないといわなければならぬ。

京都大学電気関係諸学科卒業生の同窓会たる洛友会が生れる時にも、その推進者の一人として大に活動されたのみならず、結成後はその運営責任者として最も力を払われたのである。本部総会は勿論のこと、各支部の諸会合にも顔を見せないことな

く、二千名に余る会員の消息は、同君に聞けば立ち所にわかると云われた程である。完備されて居る今日の卒業生名簿は、実に同君の手に成る勞作と云わなければならぬ。

私は応用科学研究所には理事長という職責に立って居たり又洛友会には会長という榮譽を与へられて居たので、その双方共に山村君の手腕と努力に依存して、辛うじて責務を全うし得たという次第で、今更の如く同君への感謝の辞に窮するのである。

山村君は私よりは数年の年下であるが、大分太って居られたので、心臓に多少の懸念があり、いつも健康のこと休養のこと等について話し合っ居たが、何分あのような精勵な人柄だから、中々休暇を取ろうとはしなかつた。そしてあの日も、午後まで事務室に居て、その夕、帰宅後突如急逝されたというのである。少し早くから休養して貰っていたら、こういうことにならなかつたのではなからうかと思うと、残念でたまらない。

私には公私共に片腕として、二十余年間、何時も側について居てくれた、云わば因縁の深い山村君のことだから、これから後も何時までも、研究所と洛友会の中に、同君の魂が生きつづけてくれるものと信じて居る。

## 山村忠行氏の思ひ出

東京支部長

山本三郎

私は図らずも昨年洛友会東京支部長を仰せつかりましたが、丁度昨年は会員名簿に広告を募集する年に当

り、其の爲め山村さんと何回か御会  
いして親しく御話をお伺いする機会  
に恵まれました。御話は落友会運営  
の苦勞話が多く會員中には怠慢な人  
もいて名簿の整理編集は大変面倒で  
ある事や親の心も知らず会費の払込  
みも思わしくない事など本部での方  
務の処理に日當心を砕いて居られる  
様子を承り山村さんの大変な御努力  
に対し、深い感謝の念をいただきました。  
特に名簿については全會員間を  
結ぶ絆であるとお考へから会費払  
込如何にかかわらず全會員に發送し  
て居られる御氣持や、永年其の編集  
に工風をこらして改善をつみ重ねて  
来られ現在の索引まで完備した心  
のこもったものに仕上げられた事に  
対し尊敬の念をいただきました。そし  
て今更乍ら今日まで感謝の念もなく  
名簿を手にしたり、又時々会費も忘  
れたりした私がほんとうに羞かしく  
申訳なく思いました。

山村さんは落友会の将来について  
も御自身が引退された時の事まで御  
考へになり、会の基金一千万円を作  
り此の運用でやる計画をたてられ着  
々資金集めをして居られました。此  
の爲に広告代については我々支部の  
者としては自分達で苦勞して集め  
たものでもあり又支部の業事も盛大  
にしてゆき度いので其の配分につい  
てはいつも山村さんとの間に手紙し  
い談判が初まるのでした。然し歴代  
の東京支部長も山村さんの悲願とも  
云へる基金のために御希望に應ずる  
のが常だったと承っています。

現に石川前支部長も其の際別途に  
追加募集して協力しました。私も御

主旨に賛成し懸命に募集しました。  
不況の折柄でしたが幹事の皆様にも  
分担をきめて努力していただいた結  
果幸にも予定額を越える応募を得ま  
した。山村さんに喜んでもらえる日  
を楽しみに待っていたのに今はほん  
とうに悲しい思い出となってしま  
いました。

憶い出

東京支部 大西冬蔵

山村忠行さんが急になくなられた  
という知らせが、東京支部の松尾さ  
んからご連絡があったときには、思  
いもかけぬことなので、全くショッ  
クだった。君は申すまでもなく落友  
会そだての親で、同会を今日の発展  
に導かれた功績は、まことに大き  
い。当支部では君とは因縁の浅から  
ぬ人も多いので、一夕座談会を催し  
君の憶い出を語り、追悼の記にいた  
そうということになったが、結局は  
追悼の記事を同級生の一人たる小生  
が引受けさせられた。

さて同君との知り初めは、高等学  
校時代であった。君は京二中の出身  
で、中学卒業と同時に兵役につかれ  
三年間つとめて陸軍砲兵少尉に任ぜ  
られた、それで三高では小生より  
もご年配だったので、敬意を払って  
いたものであった。大学電気工学科  
では三高から入学したのが全級の大  
半を占めていたので、高等学校の連  
続みたいなような観があり、君はテ  
ニスに堪能だった間、学級の代  
表役として牛耳っておられた記憶が

ある。  
大正六年七月ご卒業(当時大学卒  
業は七月であった)後、君は神戸の  
川崎造船に就職、その船舶用電気  
機器の設計に当られた。小生も同じ  
く神戸の電気機械の会社に勤めてい  
たので、小生の住居のあった平野天  
王谷から、君の上沢七丁目のお宅ま  
で、よく往復したものである。君は  
在学中に結婚されてご伉儷と新家  
庭を持っておられたが、当時まだや  
つとよ歩きのご長男が、ただ今  
は国鉄研究所の、回転電気機のベテ  
ランとして活躍されている、龍男工  
学博士であることを想うと、全く夢  
のような感じである。

その後君は神戸を去って大阪に移  
られ、小生もつとめの都合で東京  
に移ったので、交際は、年賀状の交  
換程度にとどまった、終戦後は応研  
につとめられる一方、落友会の役員  
としてしばしば東京に向かわれた  
そのあとの君のご活動ぶりについて  
は小生以外により適当な方々が多数  
いられるので、その方達に語ってい  
ただこうと思う。

今までに君の行われた会務につい  
ては、応科研の有能な方があとを継  
がれる趣であり、又君のご一家は、  
竜男君のお話によれば、未亡人の外  
三男二女、何れも電気事業方面にご  
活躍されている由で、君も思いを残  
すことなく昇天されたものと察す  
る。  
謹んで深く哀悼の意を表し、君の  
ご冥福を祈る次第である。

山村忠行氏の追憶

中部支部 竹上武雄

古田久一

私も二人は中部支部の幹事とし  
て山村さんには格別お世話になっ  
た。「〇月〇日に中部支部の総会を  
開催します」という手紙を差し上げ  
るだけで早速関係方面に連絡をして  
下され、当日は会長初め誰々が出席  
される、或は会長は要用のため出席  
いたしかねるなどのご返事を必ず  
一週間以内にはいただいた。一週間  
よりおくれたときは会長が上京中で  
由が附記されてあった。もちろん山  
村さんご自身は過去十数年にわたっ  
て必ずといっていい位欠かさず  
はるばる京都から出席して下さった  
のである。いつも鳥養会長或いは母  
校の恩師の傍らにあのでつぷり肥え  
た頑健そうなからだで黙然と端座さ  
れていた老紳士の姿が今更ながら懐  
しく憶ばれる。そして温厚そのもの  
のような風格は黙々のうちにも和氣  
を大いに発散されて総会の雰囲気  
をなごやかにして下さったことを思  
い出すのである。

総会の世話役としての私どもにと  
つて特に感謝したいことは総会への  
出席連絡の書面に当年度の支部会費  
納入額は〇〇円で当日小生持参と必  
ず添書してあったこと、そして几帳  
面に記入した明細書とともにご持参  
の現金をの席で手渡し下さったこと  
で、お蔭で会計は大変楽をさせ  
ていただいた。さらにつけ加えた  
いことはお帰りに当って前もって用  
意した京都までの乗車券をお渡しす  
ると「ご馳走はいただくが乗車料金は  
本部持ちになつて居るから」とい  
ってそれに相当する金額を渡される  
といった几帳面に思わず頭が下が  
った。大体がでつぷり肥えた体格の  
持主は万事おようであるのが通例  
だが山村さんは寛容な風姿でありな  
がら規律は厳守するというきびしい  
心の持主で、いわば温厚篤実の典型  
ともいふべき人であった。鳥養会長  
の信任の厚かったのも宜なるかなで  
ある。さて今思い出してみると昨年  
五月二十九日の中部支部総会には鳥  
養会長、林教授とともにご出席下さ  
るといふ連絡をいただいで当日名古屋  
駅へお迎えに出たところ山村さん  
の姿が見えず、会長からは単に都合  
がわるくて来れなかったとのことだ  
ったのでさして気になかなかつたが  
今から思うとその時既に健康を害し  
ておられたのかも知れない。そうで  
あったとすればお見舞い上げなかつ  
たことが悔まれる。昨年の五月十  
六日京都ホテルでの本部総会で大変  
はりきつて会長代理をつとめられた  
元氣なお姿がついに最後の思い出と  
なつてしまつたのである。

山村忠行氏を偲んで

落友会中国支部幹事

謹んで山村忠行氏の御冥福をお  
祈り申し上げます。  
去る十月二十八日たまたま落友会  
名簿の件で応用科学研究所の氏のと

ころに電話いたしました処、前日の二十三時に心筋梗塞で逝去されたとの訃報が伝えられ、持っておりました受話器をおとす程に驚いた次第でした。

思えば当地方の洛友会々員が氏と親しく接する機会をえましたのは、中国支部の発足総会であったと思えます。それについても氏が電気教室の懇話会から同窓会設立の議がもちあがり東奔西走され、洛友会誕生まで非常な御苦勞をされたことも先輩諸兄から聞かされておりましたし、昭和二十七年十一月洛友会が正式に発足してからは幹事として会の運営に寄せられた熱情と努力は並たいていではなかった事と存じます。

二十八年十二月に当中国支部結成以来、教室の諸先生方の御來広を機に、毎年支部総会を開催しています。が、氏は洛友会本部幹事として万障をくりあわせの上、御身体の不自由をおして殆んど毎回御來会いただき支部会員一同感激していたものであります。

支部総会では氏から洛友会本部や各支部の近況を紹介願うわけですがその折に各年度の会員の増減、会員数などメモも見られずに御披露なさるのに驚いたものでした。これは氏が幹事として洛友会に打込み、会員の一人一人と血のかよったつながりと、会への情熱のあらわれではなかったでしょうか。

会の席上色々とお話をうかがっておりまして会員にとってやさしい老先輩であり、なごやかな雰囲気の中に慈父のような親しさをほのぼの

と感じたものでした。また御老体の上、足の御不自由を御参会下される熱意に驚かされ、おたずねした事がありました。その折、何よりも各支部が盛会で会員に会い、特に若い会員が年々増加し、一夕一堂に会して欲談するの何よりの愉しみと笑顔で語っておられたのが眼の前にあるようです。

氏が洛友会の誕生から会と共に歩んで来られ、いかほど会のため御尽力なされましたかは知り知れないものがあり、あらためて氏の誠実な人格が偲ばれます。

洛友会の運営企画にわたって、名簿の作成、編集に、会報の編集会費の収納等その御苦勞は大変であった事と拝察し、その熱情には吾々頭さがる思いがいたします。今までは会報で各支部総会記事写真の中に必ず氏の慈顔に接し懐しく存じておりましたが、これもかなわぬこととなりました。

洛友会としては、かけがえのない人をつたった感じがいたしますが、今あらためて氏の熱情と御厚情におたずねするためにも会員一同今後一層洛友会が隆盛発展するよう努力してゆきたいと思えます。

多田大先輩の  
懐旧記に就て  
東京支部長 山本 三郎  
副支部長 松尾 三郎  
幹 事 河野 義徳

洛友会の古い先輩がだんだん少なくなつて来るから、今の内に昔の御

話を伺っておき記録に残しておき度いとの声が、昨年の夏頃から東京支部の幹事の間で提唱されました。その第一号として、日頃から東京支部の資金援助を頂いて居る多田大先輩(明治三十七年卒業)の教室時代等の御話を録音しておき度いと考へ、昭和四十年十月十三日に我々三人が多田さんの御宅を訪問し、その趣旨を御願ひ致しました。以下は多田さんの貴重な懐旧記で、多田さんは昔と時代が変わつて居るからとの理由で御躊躇されましたが、特に御願ひして会報にのせて頂くことになりました。

多田 耕象

第一、入学当時の教授連

入学宣誓式当日木下総長は「君達は専門学科の勉強時間をさいて自分の修養に役立つと思う本を読め、それは小説でも何でも良い、但それを繰返へし繰返へし読め、後日役に立つであろう」と訓示された、私はそれを実行した者の一人でした。

当時電気教室の教授は難波、小木青柳、小倉の諸先生で、難波先生の講義は機械の朝永先生、土木の大藤先生と共に実に雄弁で且明瞭でした。小木先生は体格偉大にさっぱりした方で電鉄の講義を受けたが学者肌の方ではなかった。

青柳先生は独乙留学中で帰朝後二年の時配電の講義を受けた。小倉先生には電気磁気の講義を受けたが未だ一と月たないうちに今日は君達の試験をやると云われて一同を驚かせた、元来先生は講義は

お上手でなく、前から不平を云う者がいたの(原先生に講義を解かり易くして下さいと申出ることとなり代表に四方来三尾君(同君は非常な秀才で卒業後川崎の東京電気におられたが関東大震災で亡くなられた、惜しいことである)とかなり先輩の聴講生と私が選ばれ一夜先生のお宅を訪問してお願いしたが先生は本を出版したい考えもあるので君達誰かのノートをよこせ訂正してやるからと云われたので翌日学校で報告したが誰れも賛成せず泣き寝りに終つた

第二、同期入学の同窓

聴講一名を含めて七名位であったが、今生きて居るのは神戸在住の中川惠郎君と私の二人丈である、中川君とは従来年賀状の交換だけであつたが此夏歩くのが多少困難になつたとの通知を受けて以来互に月1、2回の文通を始めた。

第三、大正初期在京の先輩と洛友会の紀元

私は大正元年猪苗代水電に入り東京に出た、当時在京の先輩は日本電気の梶平治君、通信局の高田善彦君古川電気工業の高橋本枝君、四国電力社長の寒川恒貞君、芝浦電気の清水莊一郎君、市電の太田原俊君、高田商會の西崎醇夫君の七名で執れも京大電気出身者としての名を恥かしめない立派な方々であった。私はその年の秋猪苗代の現場に行ったが、翌二年在京卒業生の同窓会をやるとの通知を受け上京した、場所は日比谷公園前帝國ホテルの左よりで当時は

二、三階建ての商店ばかりで、その中の牛肉屋で発会式を挙げた、その後二回目か三回目に会の名前を付けようとの発案があり多分高橋本枝さんか清水莊一郎さんが「洛友会」の名付け親であつたと記憶する。

第四、非常識な私

私は全く常識に欠けた男で一生を書生カタギで通した様なものです、それで社会に出てはこれではいけないと思ひ、会社の上役や同僚、若い人達迄のやり方を観察し、その良いと思うことを真似して、どうにか働いて来ました、今は故人となつた猪苗代発電所での同僚中川清君は非常に常識の豊かな方で私は同君に教えられたこと多大であつたことを今でも深く感謝しています。

第五、ツムジ曲りの私

私は若い人達をば可愛がつつてものだが、上役の方に誤りがあると思ふと直言する悪い癖があつた、誰れでも人間だから、たまには誤りのあつたのは当然のことです。私がそれを責めたのは大人なげなかつた老人となつた今日考えている、例えば京都電灯では社長は出勤せず、一切を警察署長あがりの支配人に委せていたが技師長が欠勤せられた或る日庶務主任が来て、「会社の工具が需要家で悪るいことをしたので支配人は警察へ出せ」と云うがと私の意見を聞くので「警察へは出すな社内では処分せよ」と答えた、庶務主任は警察えも行ったが、結局私の案に決まつた。

また、

京都市臨時事業部時代の或る年の冬琵琶湖の水が減水して諸所への給水を減じていた時のことである、大滝技師長の同県人で主人は水路係をやり家族は山県公の別荘番をしいたのが池の水が不足すると技師長に嘆願して水を増してもらったと若い二人の部員から訴えて来たので、それは不都合だと技師長に直言した、平素温厚な技師長が不機嫌な顔をせられたのを記憶する。

昭和七年東電で発電計画課と工務課とを預っていた時突然工務課員の一人を営業課へ渡せと云われたので太刀川工務部長に承諾せられたかと尋ねると何の相談も受けないと云われるので小林一三社長にこの話をすると「おれは知らない」と逃げられた故、秘書課長を社長室に呼び付け「今後人事移動に課長は免も角関係部長の承諾を得なければ承知しないぞ」と社長の面前でどなりつけた。

電力中央研究所では技術研究所を受持ち建設工事もした、松永安左エ門理事長に意見を進言する機会は屢々あった。33年改造落成と同時に辞任し翌34年一月顧問として打合せ会に出席した時、今は故人の秘書の松藤君の隣りに座ったところ同君が「よく理事長と喧嘩をしたねえ、此頃は喧嘩相手がなくて寂しかろう」とからかいますから、「私は松永大人と喧嘩した覚えは一度もないよ、只私の考えを具申した迄だよ」と笑いました。

第六、私の健康に対する多少の努力

私はご覧の通身体が小さいから健康に關しては多少努力しました、高等学校で同じ下宿の剣道有段者の松山君が毎朝木太刀を振り井戸はたで丸裸体となって水かぶりをしているを見て私は木太刀は振らなかつたが水浴を真似した、京都に来るとは木太刀をも求め卒業後も京都に在る間は続けたが明治42年ごろの或朝大失態をやつた、其時は或る寺に間借りし親籍の中学生を同居させていたが井戸はツルベ付きの大型で水かぶりにには適当でした、木太刀を振り水浴をすませて、いざ衣物を着ようとした時誤つてサルマタを井戸の中へ落した私は其儘事務所へ出かけたが、後で中学生が井戸のそばを通ると多勢の人が集まつており君所の男が井戸へサルマタを落したとひどく叱られた

そうぞうです、翌朝早く水浴をしようとして出掛けると「此井戸で水浴その他不潔のことをすべからず」と貼紙が出ていました。

私の比較登山癖、大学入学後間もなく私は友人に誘われて叡山に登り叡山が非常に気に入りが病み付きとなつて卒業後もしばしば登りました、初めの内は友人や会社の若い社員達を誘いましたが、そうそう一所に行く者もなく後には多くは独りで行ききました、登山口も下山口も種々の途に更えしました、終戦後公職追放で閑になり旧る日記を見て学生時代春と秋の日曜日には少なくとも月二回は登つていたことを知り吾れながら驚きました。

40才に先輩の勧め、**庄療法**を受けたが全身の筋肉が固くなつて

と云われ数年間継続した、療治の間は只寝ている丈で何をすることもないので本で読んだ下っ腹にしつかり力を入れる様にして呼吸する。所謂腹式呼吸を始めたが其後私の呼吸はそれが正常のものとなり普通の呼吸は出来なくなりました。

第七、若い人々の力

京都では私の仕事は小さく預る職員も数名であったが、猪苗代発電所では職員十数名外に多数の工具もいたので私の此人達に対する取扱方や態度に悪い点はないのか改善すべき点はないかと常に自分を反省し、時には独りで工事中の水路現場を散歩して此ことを反省し続けたが、幸に皆善良な諸君ばかりであったので大過なく私の勤めを果し得たと当時若かった諸君に今も心から感謝して

います、当時私と同僚の中川清君とが30才、他は皆20才代で大部分が始めて発電所建設をやる連中でしたが皆よく仕事を理解し朝早くから夕遅く迄実に勤勉でした、合宿に帰ると全く学生の寄宿舎同様の遠慮もなく何のわだかまりもなく、又時々東山温泉に休養をとりに行った翌朝など平日よりも却つて早く出勤してました、私は若い人々の力こそ偉大であると感じました。

昭和8年日滿アルミニウムをやる時も当時アルミニウム精錬の経験者はない故、若い人達ばかりを採りましたが、此時も全く同様であった。

仙石社長は後に満鉄總裁にも鉄道大臣にもなられたが、実に卒直で且無欲で真に古武士の風格を備えた方でした。

猪苗代会社の創立前、水力では使用水量の決定が一等大切であるから猪苗湖の吐け口にある十六橋の水門を開閉して種々の水位での日橋川の水量を測定することとなり、仙石さんと後の専務取締役白石さんとが丸裸体となり、水の冷たい川に入つて二人でそれをやられたとのことです、仙石さんはその前九州鉄道の社長を、白石さんは山陽鉄道の社長をやられた方々で当時の年令は60才近くであったと思う、私は此ことを友人石河君から聞かされ二人が経営者としての責任感念の如何に強かつたかを思うて感激した。

仙石社長は発電所に來られて「金を惜しまず出来る丈優秀且完全な発電所を建設せよ」と云われた、工事に金を惜しむなどの言葉を上役から聞くのは私のかなり長かつた技術者もある、吾々としては技術者の良心がある、如何に金を惜むなど云われたとて無駄な失費をするものではない、又此れを聞いた工事関係者にはより良く、より優れた工事を完成せんとする決意を奮い起させた。

神戸第一東電社長（此方も非常に立派な方であった）は大正末期から昭和の初めにかけて30社に近い電気会社の併合を断行された此等多数会社の合併に關する交渉にはなかなか面倒が多、**たが被合併会社中最優秀猪苗代水電との交渉は僅に四回の**

会合で決定したと或時神戸社長が感慨深げに話されたことを記憶する。

東電は益暮れに返子の仙石郎え若干の包み金を届けさせたが、受取る理由がないと仙石さんは拒絶する、使の者は板はさみとなり返子東京間を往復する、見るに見かねて仙石令夫人が使の者が気の毒でないですか受取られてはと口を出すと女の知つたことではないと大喝されたといふは故人となつた其使の人の直話でした。

第九、経営者としての修養とフランス技術者の態度

會員上之園親介君が電力中央研究所から欧州に出張された時の土産話に「独乙のジューメンズ社では新採用者を技術に向く者と経営に向く者とに區別し夫々別々な会社で教育し経営向きののは行く々々マネージャとする、良いマネージャのいる部又は課は成績が挙がり、そうでないのは成績が悪い」と聞かされ、私は社会に出てから若い技術者に技術を勉強せよ技術は日に々々進歩する遊んでいては新卒生にも負けるよと口癖のように云つたが私が経営者としての勉強をせよと云い始めたのは私が老年になつてからだと同君にザンゲした。

フランスの或貿易会社の東京駐在員副島英三郎君が約二年間フランスに留学し帰られた時の話に「フランスで一等浦山しく思ったのは同国の技術者諸君が重役の前で何の遠慮もなく堂々と本人の意見を發表することであつた」と云われた、これは同国の会社役員諸君が若い人達の意見

第八、私の尊敬した猪苗代水電の仙石貢社長

を聞く丈の雅量を持つて居られるためだと思います、私は現在会社の役員又は部長の地位にあられる洛友会の先輩会員諸君が若い社員諸君の意見を充分によくお聞き取りになり良い点は採用し悪い点は懇切にさとされかくして若い人達の力を充分に活用させられますことが望ましいと心から思う者であります。

私のことばかり永々としやべりましたことを、どうかお免るし願上げます。

### 中部支部の動き

支部長 本多 静雄

まづ中部支部の年中行事の紹介から初めよう。春季は名古屋市内で定時総会をやる。本部からも必ず出席していただくのが楽しい母校の躍進振りを知ることが楽しみの一つになっており、いつも三十名以上の盛会である。とかく同窓会となるとたえ出席しても年代がちがうと親しくにくいという点もあってつい年輩者に限られてくる傾向になり勝ちだが幸い当支部総会には各年代平均して出席してくれてうれしい。これは鳥養会長初め母校の恩師が京都からはるばる出席して下さることが会員を引きつける大きな力になっていると思うのでここに出席下さった諸先生方に厚くお礼を申し上げます。新幹線ができる以前はどうしても当地で一泊していただかなければならなかったで先生方に大変なご迷惑をおかけした次第であったが最近はお

易に日帰りでご出席、ただけるようになったので都合が。秋季は家族ぐるみの親睦を目的としたリクリエーション会を行うことを例とする。昨年は犬山城と明治村だったが小田島大先輩の元気な姿もみえてうれしかった。明治村とは犬山の近くにある入鹿池の景勝を取り入れた丘陵五十万平方メートルの広大な地域で、このなかに聖ヨハネ教会堂、西郷従道邸、鷗外、漱石邸など十数余に及ぶ明治時代の歴史的建造物並びに関係資料が実に心地よく配置して保管されており、古き良き明治時代の感傷にひたることができる。本部の行事としても一度計画されてはいかげんか。村長は徳川夢声さんだがその折は万端の準備を当支部でお引き受けする。

さて中部支部会員の総数はこのところ百四十名前後を上下して殆んど変化しないこれは母校の新卒業生で中部地区へ就職される人が殆んどないことを意味するのであって実に淋しい。ところで会社の課課長や上級役人になると名古屋転勤を喜ぶ人が多いそうである。それは不便なナゴ・チョン生活(名古屋での独身生活)でも「のんびりゴルフを楽しむ」ことがその理由の一つになっていると聞くが、そればかりではない。中部地方こそは今や日本中で最も有望な発展地で魅力の多い新天地であるので若い後輩の多い新進を期待する。そして洛友会中部支部が中部地区躍進の原動力の一つになることを期待したい。

岐阜、三重、静岡、長野の広域にわたる関係で距離的に親睦の直接交換のむづかしい人が多いことである。これを補う意味で昨年から親睦誌「中部洛友」を刊行することにし「一年一回の刊行ではあるが洛友お互に近況を知らせ、近況を知りその親睦交流に役立つところは大きいと信ずる。

故明大常務理事 神保成吉博士を 憶う 堀岡 正家

神保成吉博士は平素ごくがん(頑)健な体だったように思われる。戦後は職場を異にし、会う機会もあまりなかったのだが、この五月二日(土)、市ヶ谷会館での洛友会東京支部総会の時、たまたま市ヶ谷駅までの帰途、おほり端を一緒に歩きながら俗話をかわした。年よりの例にもれず、「お互いに健康に注意せねば」と話され、また近いうちに小田急沿線向ヶ丘に明大工学部の新校舎が建てられるが、その完成式には小生を招待してくれるなど、いつもの重厚な話しぶりであった。今にして憶えばこれがあの見事なくちひげをたくわえた君の英姿との最後のお別れであった。

十月十七日はちょうど日曜日、とてもおたまたまか日だったが、庭で植木をいじっているところへ、知人から「神保さんが日大病院へ入院され、胃の手術の経過があまり良くない様子」との電話。直感的に胃ガン

だなと思っ。面会謝絶とは聞いていたが、一日の午後病院へお見舞いに行き、御看護の奥さんにお眠にかかることができた。気分は割合に良いとのことだったが、毎日輸血を続けているとか。学生が進んで血を提供してくれるという話を聞き、同君の徳の深さが若い人たちのこの行為からもうかがわれ、思わず眼頭が熱くなった。

十月の末に十日ばかり地方に出かけることになったが留守中同君に万一のことでもあってはと小妻にくれぐれも旅先への連絡を頼み、不安な気持ちで離京した。しかし、旅から帰ってなにごとでもなかったと聞いて安心した甲斐もなく、十一月八日に万事休し天界に帰られたことを知らされしはしぼう然自失。早速心当りへの通知をし九日のお通夜に臨んだ。いくら考えても君が不治のガンに見舞われるなど、だれが想像したであろうか。明大武田総長のお話によると、良き飲み相手だった同君が九月初めにはがせん食欲がなくなったことだった。十日午後には、明治大学学葬が行なわれたが実に立派なもので、さすがの大記念講堂も参列者が堂外にあふれる盛大さは、故人の遺徳の宏大なることがつくづくとうかがわれた。

神保君は小生とは同年の明治二十九年に金沢の名家に生をうけられたが、早生まれの二月だったので小生より一年早く大正八年に京大電気工学科を出られ、直ちに通信省電気試験所第一部に入所せられた。小生は氏的一年後輩として第三部に奉職したので、電気試験所ではもっとも親しい友人という間柄であった。

神保君が電気計器検定事業の育成発展にいかにか偉大な足跡を残されたかについては、関係者によく知るところである。同君はその家柄や育ちのためもあるが、人一倍き帳面であり、極めてち密な頭脳を持ち、かつ所信に忠実で実行力があつたが、同君のような人でなければ、地域的にもまた関連業界にも利害が深い電気計器検定業務の全国的な普及はなかなか実現がむづかしかったのではなからうかと思う。まったく適材をえ、時と所がうまく組み合わされたものであった。

電気試験所入所以来、その上司たる第一部長として、またのちに第四代電気試験所所長として、温厚篤実な人格としての故高津清さんを助けつづいて第五代密田所長の積極果敢な実行力と組み合わせられて、数々の偉大な功績を残されたことは多くの人のよく知っておられるところである。

上記のような同君の性格は時として部下をい怖せしむることがあつたが、仕事上の筋は実にはっきりと通されていて、これがために第一部の業績が著しくあつたということができる。

昭和十八年の末、技術者養成の急務を痛感せられた当時の明大鶴沢総長は、明治大学工業専門学校設立のための人事その他重要事項の立案を当時の内閣技術院に一任せられた。たまたま小生が同院に在職しており

其衝に当たったので、神保君の手腕・徳望・学識などにほれこみ、まげて同校電気科長としての出馬を要請しその快諾をえた。その後この工業専門学校がこんにちの明大工学部として発展する間、同君のつくされた工業教育に対する貢献は簡単には筆紙につくすことは出来ない。

友松田諸師がお通夜で述べられたように、半生を役人として過された人が、その後世を教育者として、一流の域に達せられたことは、はなはだまねなことである。

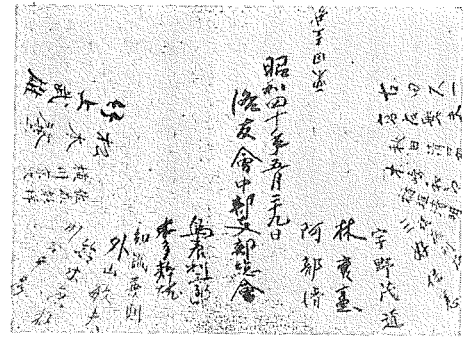
優れた工業教育者が、今後のわが国の発展のために極めて強く要請せられるこのときに当って、こつ然として氏のごとき大きな柱を失ななことは、誠に痛惜に堪えないところである。

### 四十年中部支部

#### 総会記事

五月二十九日(土) 本より鳥養会長、阿部名譽教授、林重憲教授をお迎えして名古屋山翠楼で午後四時より開催した。

まづ鳥養会長、本多支部長の挨拶があつて総会議事にはいり、幹事より昭和三十九年度の行事並びに決算報告、さらに昭和四十年年度の行事予定の説明があつたが、これらは満場一致で承認された。ついで林教授から教室の近況報告があり、また阿部名譽教授のお話のあと出席者の自己紹介をおわり、引きつづき懇親会に入つた。二気元でユーモラスな老會長を中心に終始なごやかに時を過



したが午後七時をもって閉会し、先生にはひかり号でご帰洛いただいた (古田記)

### 仙台に阿部先生を迎える

盛夏の七月十六日、阿部清先生、田中哲郎先生、川端昭先生の三先生が、仙台に御立寄りになったのを機会に、仙台の料亭中島に先生をお迎えした。

突然のことで、在仙者全員が出席出来なく、残念であつたが、出席者六名で、時の経つのも忘れて歓談した。最初に、田中先生から、教室の近況についてお聞きした、ついで話が学術におよび、阿部先生は昔と全く変らぬ若々しさで、電子計算機には国産品を用い、国産愛用を計るべしと強調され、諸外国と日本の比較になるや、最近帰国された、東北大二村先生との間で、外遊談に花が咲きお酌に来た芸者達は、ドイツ語と英語の諸国漫遊談に、ひとつづつのも忘れて、先生の話に聞かされていた。



阿部先生を迎えて  
昭和四十年七月十六日  
於仙台中島  
村志丸  
阿部清  
田中哲郎  
川端昭  
林重憲  
鳥養会長  
本多支部長  
古田記

山下実先輩が東北の良き、東北支部設立の話におよぶや、先生方も賛同され、阿部先生は仙台が案外近いのに驚いた、近いうちに東北地方の名所を尋ねてみたい、との話に在仙者一同意を強くした。東北は遠い国

の先入感があるとするれば、先づそれを払拭するためにも、洛友会東北支部を作らねばなるまい。先生方が仙台に再来されることを祈って寄せ書きも終り散会した。(幹事)

### 昭十会卒業三十年記念クラス会

昭和十年三月卒業生の三十周年記念クラス会は、昭和四十年五月十六七日の両日にわたって開かれた。

五月十六日洛友会総会に引つづいて、昭十会一同三十一名は懐かしい電気工学科教室に集会し、玄関前の大銀

杏とともに古色蒼然とした旧校舍に昔を偲んだり、また近代的な新校舍に目を見はったり思いさまざまの態。

林重憲先生に御案内を賜り、関電記念館の視聴覚教室で「黒四ダム」の映画を観賞した後、一同揃つたところで懇親会場の比叡山ホテル観山閣へ至り、恩師の岡本、松田、阿部羽村、林の五先生より近況を承り、各自の活躍の状況を披露したり、記憶の薄れた校歌の合唱を始め、阿波踊りまでとび出す感況のうちに会を閉ぢたのは午後九時過、京都大津の夜景を眼下に見下ろしながらの入浴に疲れを癒して観山閣に宿泊、翌十六日は京都の名園観賞とピワコカンスリーのゴルフに別れて解散。

(中沼記)

阿部清  
田中哲郎  
川端昭  
林重憲  
鳥養会長  
本多支部長  
古田記  
昭和四十年七月十六日  
於仙台中島  
村志丸  
阿部清  
田中哲郎  
川端昭  
林重憲  
鳥養会長  
本多支部長  
古田記

出席者は次の通り、

- 天野 宗明 田村 誠一
- 有馬 敏彦 高田 昇平
- 井上友一郎 高木 正
- 植田正一(夫人同伴) 殿井不二雄
- 梅本 忠夫 中沼 保三
- 大西 俊彦 中堀 孝志
- 荻野 和夫 林 潔
- 香山日出雄 日高 安壯
- 神谷 進 藤本 悟郎
- 北村 芳雄 森 武治
- 城戸 道生 山田 昇
- 小寺 正晴 和久 利保
- 佐野 一雄 和田寿太郎
- 沢田忠治郎 黒田麟八郎
- 塩沢 弘 徳岡毅(夫人同伴)
- 清水 威寛

### 昭和五年組のこと

六月四日、五日の両日を利用して、卒業三十五年の記念会を催した。和田君のお世話で、伊東の帝人寮で初日を過ごし、五日は、伊豆半島の最はて石廊崎へとドライブし、さらにスガイランを通過して十国峠にて強羅の金茂里館へと長駆し、ここで仕上げの宴会をした。

もう六十の坂を越したもので、越そうとしているものばかりなのだが何れもお年とは思えぬ元氣な姿を見せられたのは洵に心強かった。二三の連中は、とりわけ大したもので、髪は緑り、齒も親から貰ったまま、血色もよく、二度目のお勤めは十分保証できるし三度位いけそうな体力の持主があった。だから今回は、人生はこれからだという洋々たる生氣が

あふれていたのも、云の特長であった。

ゴルフ、マジジャンの夜ふかしを繰りかえすダブルヘッター組もあるというムードは、此頃の老人の相(スガタ)ではあるまいか。それも、あと五年は絶対に待てないというので、二年後に北陸に向いて二日宿泊の同期会をやることを決議したのは、年を意識し、淋しい感傷にかられたのではなからうか。

集まった面々は寄せ書記載の通り十四名であるが、野田夫人が参加され、紅一点ではあるが会をなごやかなムードに引ばって頂いたのは感謝に堪えない。

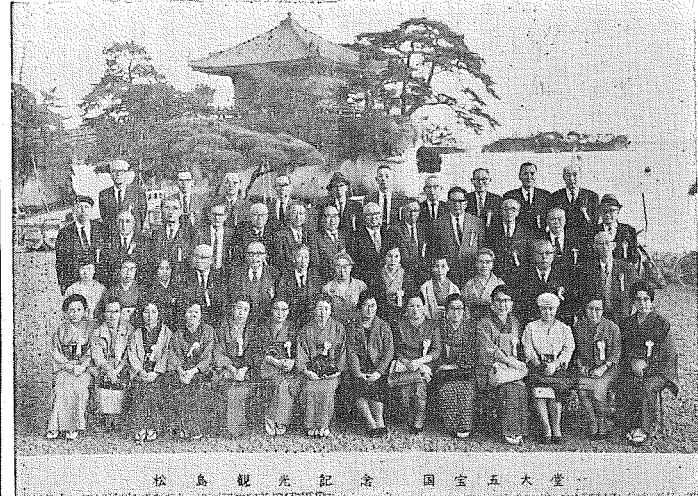
昭和五年組の同期会  
於東京 伊東 帝人寮  
六月四日 五日  
出席者 天野 宗明 田村 誠一 有馬 敏彦 高田 昇平 井上友一郎 高木 正 植田正一(夫人同伴) 殿井不二雄 梅本 忠夫 中沼 保三 大西 俊彦 中堀 孝志 荻野 和夫 林 潔 香山日出雄 日高 安壯 神谷 進 藤本 悟郎 北村 芳雄 森 武治 城戸 道生 山田 昇 小寺 正晴 和久 利保 佐野 一雄 和田寿太郎 沢田忠治郎 黒田麟八郎 塩沢 弘 徳岡毅(夫人同伴) 清水 威寛

洛友会諸兄の御健康と母校の弥栄を祈って撰筆する。(伊藤 生)

### 四ノ五ノ会

四ノ五ノ会はいつ始まったのかさだかでない。十五年前、昭和二乃至十年の同窓生で、京都在任の方だけが集るエレキ会というのがあった。

四ノ五ノ会  
於東京 伊東 帝人寮  
六月四日 五日  
出席者 天野 宗明 田村 誠一 有馬 敏彦 高田 昇平 井上友一郎 高木 正 植田正一(夫人同伴) 殿井不二雄 梅本 忠夫 中沼 保三 大西 俊彦 中堀 孝志 荻野 和夫 林 潔 香山日出雄 日高 安壯 神谷 進 藤本 悟郎 北村 芳雄 森 武治 城戸 道生 山田 昇 小寺 正晴 和久 利保 佐野 一雄 和田寿太郎 沢田忠治郎 黒田麟八郎 塩沢 弘 徳岡毅(夫人同伴) 清水 威寛



松島 観光 記念 園宝 五大堂

いつのまにか昭和四、五年組が皆出席し、あとは次第にご遠慮なさるようになった。それで甚だ身勝手なことであるが、四ノ五ノ会という語呂のいい名前にしてしまつた。名前が固定すると、中味もきまつてしまうのであるが、林重憲先生と辻藤吉先生だけは、さすがに偉い、ずっと皆出席されて会を賑かにしていただいている。感謝感激に堪えない。

しかし去年あたりから、田中君、河合君がへり、今年秋には藤本君が福井県へ行かれる。同伴会であるから、一挙に六名減る訳。いよいよ会のピンチが到来したという感じである。すでに二十回あまり会を重ねると、会員同志は親戚以上の深い「えにし」を結んで、大いに力になり、頼りにしている。だから早よう

### 十四日会東北大会記

昭和三十七年に家内を連れて熱海に集つてから、九州、紀州に旅行し、四度目の今年は東北地方を旅行することになった。

十月十六日山形市外の上ノ山温泉に集合。沢庵禅師の流瀆地、歌人斎藤茂吉の生誕地であるが、戦後は労組の全国大公で有名な温泉である。都合で単身参加の人達も、二十二組の老夫婦も一年振りの再会に互の健康を喜び合い、秋の夜の更くるま温泉情緒を染しんだ。翌十七日は二台のバスで蔵王エコーラインに、都会で見慣れない深山の紅葉を鑑賞し、松島の風光をめてた後、仙台ホテルで東北民謡に時を忘れた。十八日は青葉城趾や榴ヶ岡の政岡の墓など仙台見物をして、午後次城島の東海原子力発電所の竣工

近き一本松氏の功績をたたえ、夜八時上野で来秋の京都の会合を楽しみに解散した。(平井記)

### 昭和十年講習所卒 同窓会

新緑漸く萌え出づる五月一日、講習所昭和十年卒業生の同窓会を思い出の地京都鴨川ほとりの「北斎別館」に開くことが出来ました。卒業後数年にて戦争に、続いて終戦後の混乱の時代を経て、世の中がやや落ち着いた頃、同窓会を開いてはとの声も聞かれましたが、中々その機会を得ず今日迄のびのびになってしまいました。お招きした先生では(重)先生だけしか御都合がつき得ませんでした。又我々の方も五月の連休に入ったためか出席者は亀田、堀口、佐々木、柴田、山内、米林、近藤の七名で少なかつたが残念でした。

昭和40年5月1日 於北斎別館

### 電気工学講習所 昭和十年卒業 30周年記念會合

御元氣そう、然も三十年昔の先生とは一寸お褒りになり一段と重味を加えられた先生を中心と思ひ出話に現在を忘れ、昔の若さにかえって時のすぎるのも忘れて歓談出来ましたことを感謝致しています。

尚この時の取り決めとして、今後時々この機会を申し合せましたので、今回御参加出来なかつた皆さんも次回には是非御出席される様お願いします。(近藤記)

洛友会昭和三十二年會

### 洛友会昭和三十二年會

関西電力の工務部長になった真弓克己君の上京を機会に同君を囲んで本年度最初の昭和十三年會を催す。場所は平野進君の斡旋で電々公社の三田台クラブ

### 洛友会 昭和三十二年卒業生クラス會 於三田台クラブ (昭和四十一年二月二十四日)

真弓克己

片岡 平野 南部 松尾 伊野 渡 田林 本林 (敬)

ブ。九名出席、その中には卒業以来二十八年振りに会ったという、西堀博君もいた。同君は今度日立助川から、東京に移転、会の常連になつたが、会に会ったので話は尽きなかったが、会の収獲として、今度隔月に年六回、十三年ゴルフ会を行なうことを決議した、他年度の卒業の諸兄もゲストして飛入り歓迎、第一回は南部清士君の御世話で、四月九日(土)東京国際にて行なうことを決めた、関西の十三年組も真弓君が連絡してこの日多数参加されるようにするのを約束。又物故クラスメンバーの遺族を慰めることなど打合せで盛會裡に散会した。(昭四一、二五、松尾記)

### 洛友会總會通知

一、日時 五月二十一日  
二、總會及び懇親會場

高輪プリンスホテル (電) 四四三二五三二一

国電、品川駅下車(地図参照)

三、總會 午後四時より

議案 一、事務並に会計報告

二、昭和四十一年度予算審議

三、その他

四、懇親會 午後五時より

五、散會 午後六時半の予定

六、會費 金一、〇〇〇円

四十一年度学部卒業生半額

會費は別紙振替用紙をもってお払込み下さい。

なお、これをもって總會並に懇親會出席御通知に代えますから、五月十日迄に到着するようお送り下さい。

七、家族同伴歓迎

本會合には御家族同伴を歓迎することになっておりますから多数御申込を頂き度

八、諸先生の御出席

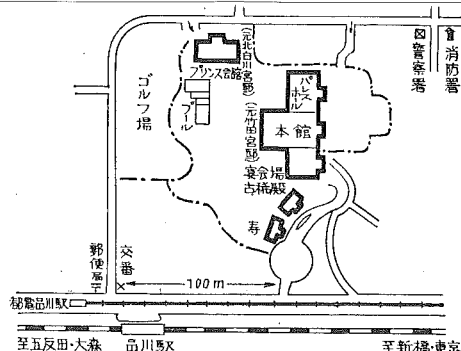
本總會には鳥養会長はじめ諸先生が多数御出席になります。

なお洛友会總會に先立ち左記の通り東京支部の總會を開催致しますので、東京支部会員の方の参加をお願い致します。

### 洛友会東京支部總會並に新會員歡迎會

一、日時 五月廿一日(土) 午後三時より

二、會場 高輪プリンスホテル



### 洛友会々々費徵集に ついて

本會報には昭和四十一年度の會費徵集について払込票を同封してありますから、お忘れなくお払込み下さい。

なお前年度およびそれ以前の會費未納の方には合算して請求いたしますから、これまたお忘れなくお願いします。